

しみずますみ もう いま まえばししひろせちょう す  
清水眞澄と申します。今、前橋市広瀬町に住んでいます。

わたし ねん がつ にち きゅうまんしゅう ほくあんしょう げんざい こくりゅうこうしょう う  
私は、1941年9月29日に、旧満州の北安省、現在の黒竜江省で生  
まれました。父は清水清作、母は律子といます。

とまん まえ ちち しもに たまち す だいく ふけいき しつぎょう  
渡満する前、父は下仁田町に住んでいて大工でしたが、不景気で失業  
じょうたい  
状態だったそうです。それで、国の呼びかけに応じて、1937年に父は、  
だい きぐん まはいろんかいたくだん せんけんたい ひとり とまん かいたくだん かおおくけんせつ  
第6期群馬海倫開拓団の先遣隊として一人で渡満し、開拓団の家屋建設に  
じゅうじ げんち ひと ちゅうごく いえ た かた おし はい  
従事しました。現地の人に、中国の家の建て方などを教えてもらい、海  
ろんえき ちち つく ちち にゅうしょく とち あ ち  
倫駅は父たちが造ったそうです。また、父たちが入植した土地は荒地  
だったの、開拓団の人たちが、現地の人たちと、一から開墾したそう  
す。その後、満州での生活が落ち着いた1939年、父は日本に一時帰国し、  
わたし そふぼ はは どうじ さい あに ともな ほくあんしょうはいろんけん ごい こむら  
私の祖父母と母と当時2歳だった兄を伴い、北安省海倫県五井子村に  
にゅうしょく かいたくだん ほんぶ みい こむら がっこう じいん びょういん  
入植しました。開拓団の本部があった三井子村には学校や寺院、病院、  
しょうてん かくむら ちゅうごくじん す たが なかよ  
商店などがありました。各村には、中国人も住んでいて、お互いに仲良  
くつきあっていたそうです。

そふぼ おじ かぞく いっしょ ちか す ちち だいく なか  
祖父母は叔父の家族と一緒に近くに住んでいました。また、父の大工仲  
ま ちゅうごくじん きんじょ す  
間の中国人が近所に住んでいました。

(問)

わたし さい ねん おとうと う かぞく にん  
私が3歳になった1944年に弟が生まれ、家族5人になりました。  
ちち あそ むら まつ ももたろう めん いっしょ  
父は、よく遊んでくれて、村の祭りで桃太郎さんのお面をつけて一緒に  
おど  
踊りました。そして、私をおぶってよくお酒を飲みに行きました。

(問)

ねん がつ ちち 1945年5月に、父をはじめとした、開拓団の健康な男性が全員召集され  
ました。覚えていないのですが、その時私は、父の服を手で引っ張っ  
て、「私も行く」と大声で泣いたそうです。村は、体が弱い人や、お年寄  
りと女性と子どもだけになりました。

がっ ちち どうはつ つめ とど 8月になって、父から頭髪と爪が届きました。8月12日には、残された開  
拓団員、約500人全員が本部のある三井子村に集まって、集団生活をする  
ことになりました。空襲があると、防空壕の中に逃げました。8月15日に  
はいせん き にほん かえ おも 敗戦を聞いて、日本に帰ると思っていました。2週間後ぐらいに、3名の  
それんへい き 開拓団の人は誰も、武器を持って戦おうとはしな  
ったので、ソ連兵はただ私たちの見張りだったと思います。

## (間)

がっ にち ばん あわ せいかつようひん かね だ 9月12日の晩、みんなが慌ただしく生活用品やお金をしまい出しました。  
はは かね ふく うら ぬ つ 母もお金を服の裏に縫い付けたり、衣料などを風呂敷に包んでまとめた  
りしました。深夜になり突然、銃声が聞こえました。中国人の強盗団を  
ど ひ おおぜい ど ひ ぼうみん げんちじん 村 はい 土匪といいましたが、大勢の土匪や暴民となった現地人が村に入ってきた  
のです。そして、開拓民の持っていた物を強奪し、30人以上の日本人が  
ころ い のこ わたし ちゅうがっこう うんどうじょう あつ 殺されました。生き残った私たちは中学校の運動場に集められて、み  
んな着ていた服を脱いで渡しました。土匪の頭は、以前五井子村に住ん  
でいたことがある人だったので、みんなで命乞いをし、助かりました。  
それんぐん れんぱつじゅう はっぼう おお ど ひ ころ どうじ じょうきょう ソ連軍は連発銃を発砲して、多くの土匪を殺しました。当時の状況を

記録したものによると、この時1000人を超す暴民が襲ってきたと書かれています。

土匪に殺された30人以上の人の遺体は、本部の建物の中に集められて建物ごと焼かれました。数時間にわたって燃えて、ものすごい臭いがしました。その光景と臭いは、今でも頭から振り払うことができません。

(間)

次の日、ソ連兵に警護してもらって、長春の避難民収容所に向かうことになりました。母は無一文になって、長春に行っても何もできないと考えて、みんなと一緒に残る決断をしました。父の中国人仲間がいたこともあったと思います。このことは、隣人一人にだけ話して、祖父母とはそこで別れました。

(間)

みんながいなくなり、ソ連兵が、残っている人や物がないか、見に来ました。私たちは、殺された土匪の死体がたくさんあった学校のトイレに隠れ、息をひそめてソ連兵たちが帰るのを待ちました。母は「声を出さないで。捕まれば生きられない。」「開拓団が残していった食べ物があるから、ここに残っていれば、生きられる。あまり細かいことは考えない。」と言いました。その夜は現地の人が家に入れてくれましたが、ソ連兵がいて危険だったので、元々開拓団として入植した五井子村に行きました。私たちが住んでいた家には、現地の人が住んでいたのもので、母は、空っぽの倉

こ なか わたし い げんち ひと ふとん た もの も  
庫の中に私たちを入れました。現地の人が布団や食べ物を持ってきてく  
れたので、屋根のある所<sup>ところ</sup>で横<sup>よこ</sup>になって、寝<sup>ね</sup>て、食<sup>た</sup>べることができました。

そのとき母<sup>はは</sup>が、ありがたそうに、「父<sup>ちち</sup>の中国<sup>ちゅうごくじん</sup>人の友人<sup>ゆうじん</sup>が、100キロぐらい  
のお米<sup>こめ</sup>が買<sup>か</sup>えるお金<sup>かね</sup>をくれた」と言<sup>い</sup>ったのを覚<sup>おぼ</sup>えています。

みっか  
3日ぐらいここにいましたが、ここも安全<sup>あんぜん</sup>ではないということで、父<sup>ちち</sup>の  
大工<sup>だいく</sup>仲間<sup>なかま</sup>の中国<sup>ちゅうごくじん</sup>人を頼<sup>たよ</sup>って、八井子<sup>はちい</sup>村<sup>むら</sup>に行<sup>い</sup>きました。

はは あ もの とくい し げんち かねも わたし  
母は編<sup>あ</sup>み物<sup>もの</sup>が得<sup>とくい</sup>意<sup>い</sup>でしたが、それを知<sup>し</sup>った現<sup>げんち</sup>地<sup>ち</sup>のお金<sup>かね</sup>持<sup>も</sup>ちが、私<sup>わたし</sup>たち  
かぞく す へ や ようい す こ き もの あ い  
家族<sup>かぞく</sup>が住<sup>す</sup>む部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>を用<sup>よう</sup>意<sup>い</sup>するので、住<sup>す</sup>み込<sup>こ</sup>みで着<sup>き</sup>る物<sup>もの</sup>を編<sup>あ</sup>んでほし<sup>い</sup>と言<sup>い</sup>っ  
てくれ<sup>い</sup>ました。その家<sup>いえ</sup>が終<sup>お</sup>わると、その家<sup>いえ</sup>の人<sup>ひと</sup>が次<sup>つぎ</sup>のお金<sup>かね</sup>持<sup>も</sup>ちの家<sup>いえ</sup>を紹<sup>しょう</sup>  
かい  
介<sup>かい</sup>してくれ<sup>い</sup>て、いろい<sup>い</sup>ろな家<sup>よ</sup>に呼<sup>せい</sup>ばれ<sup>かつ</sup>なが<sup>ねん</sup>ら<sup>ん</sup>の生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>を2年<sup>ねん</sup>ぐらいし<sup>ま</sup>した。

しゅうせんとうじ はは あに にちじょうかいわ ちゅうごくご はな わたし  
終<sup>しゅう</sup>戦<sup>せん</sup>当<sup>とう</sup>時<sup>じ</sup>、母<sup>はは</sup>と兄<sup>あに</sup>は日<sup>にち</sup>常<sup>じょう</sup>会<sup>かい</sup>話<sup>わ</sup>ぐらいの中国<sup>ちゅうごくご</sup>語<sup>ご</sup>が話<sup>はな</sup>せ<sup>ま</sup>した<sup>が</sup>、私<sup>わたし</sup>は  
はな  
あまり話<sup>はな</sup>せ<sup>ま</sup>せん<sup>で</sup>した。でも、2歳<sup>さい</sup>年<sup>ねん</sup>上<sup>じょう</sup>の中国<sup>ちゅうごくじん</sup>人<sup>じん</sup>の女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>と遊<sup>あそ</sup>ぶう<sup>ち</sup>  
に、少<sup>すこ</sup>しづ<sup>はな</sup>つ話<sup>はな</sup>せ<sup>る</sup>よう<sup>に</sup>な<sup>り</sup>ま<sup>し</sup>た。

(間)

ねんごろ す こ はたら いえ ひと いっしょ へん おお  
1947年<sup>ねん</sup>頃<sup>ごろ</sup>、住<sup>す</sup>み込<sup>こ</sup>みで働<sup>はたら</sup>いて<sup>いた</sup>家<sup>いえ</sup>の人<sup>ひと</sup>たちと一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に、この辺<sup>へん</sup>では大  
ちやう かるうむら ひ こ そうろくくせいふ しゅつちやうじよ  
きい丁<sup>ちやう</sup>家<sup>か</sup>楼<sup>ろう</sup>村<sup>むら</sup>に引<sup>ひ</sup>っ越<sup>こ</sup>しま<sup>し</sup>た。そこは双<sup>そう</sup>禄<sup>ろく</sup>区<sup>く</sup>政<sup>せい</sup>府<sup>ふ</sup>の出<sup>しゅつ</sup>張<sup>ちやう</sup>所<sup>じよ</sup>があ<sup>っ</sup>て、  
ちゅうごくこくない じょうほう はい ぼしよ はは そんなちやう ちゅうごくご  
中国<sup>ちゅうごく</sup>国内<sup>こくない</sup>の情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>が入<sup>はい</sup>って<sup>くる</sup>よ<sup>う</sup>な場<sup>ば</sup>所<sup>じよ</sup>で<sup>し</sup>た。母<sup>はは</sup>は、村<sup>そん</sup>長<sup>ちやう</sup>に中国<sup>ちゅうごくご</sup>語<sup>ご</sup>  
じじょう はな ちい ひらや かぞく にん せいかつ  
で事<sup>じ</sup>情<sup>じょう</sup>を話<sup>はな</sup>し、小<sup>ちい</sup>さな平<sup>ひら</sup>屋<sup>や</sup>をもら<sup>っ</sup>て、家<sup>か</sup>族<sup>ぞく</sup>4人<sup>にん</sup>で生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>するよ<sup>う</sup>に<sup>な</sup>り<sup>ま</sup>  
した。近<sup>きん</sup>所<sup>じよ</sup>の人<sup>ひと</sup>たち<sup>が</sup>分<sup>わ</sup>けて<sup>くれ</sup>た食<sup>しょく</sup>料<sup>りょう</sup>と、母<sup>はは</sup>と兄<sup>あに</sup>が物<sup>もの</sup>乞<sup>ご</sup>い<sup>を</sup>して<sup>もら</sup>  
って<sup>きた</sup>食<sup>しょく</sup>料<sup>りょう</sup>で、ど<sup>う</sup>にかこ<sup>う</sup>にか食<sup>く</sup>い<sup>つ</sup>な<sup>ぎ</sup>ま<sup>し</sup>た。

(間)

ねんごろ ちか とうごむら うつ わたし さい しょうがっこう にゅう  
1949年頃、近くの東呉村に移りました。私は8歳のとき小学校に入  
がく ころ わたし おとうと ちゅうごくご じょうず  
学しました。この頃、私も弟も中国語が上手になっていましたが、  
とも にほんご はな ほか そと はは  
友だちから「日本語を話してみろ」と、よくからかわれました。外で、母  
にほんご はな はは にほんご はな い  
と日本語で話すといじめられたので、母には日本語を話さないでと言いま  
いえ なか はは あに にほんご はな わたし おとうと にほん  
した。家の中で、母と兄は日本語を話していましたが、私と弟は、日本  
ご つか すく き はな むずか  
語を使うことが少なくなっていき、聞くことはできても、話すことは難  
しくなっていきました。

## (間)

ねん せいかつ きび はは ちじん しょうかい  
1950年、生活がまだまだ厳しかったこともあって、母は知人に紹介さ  
ちゅうごく ひと さいこん とうごむら きろ はな にいこむら ひ こ  
れた中国の人と再婚し、東呉村から6キロほど離れた二井子村に引っ越  
しました。そして、家の中で日本語を使うこともなくなり、私と弟は  
にほんご かんぜん わす  
日本語を完全に忘れてしまいました。

はは ようふ あいだ こ にん にん えいようふりょう な  
母と養父との間に子どもが4人できましたが、3人は栄養不良で亡く  
なりました。養父は喧嘩っぱやくて、バクチが好きで、あまり仕事をしな  
ひと  
い人でした。

わたし うし えさ じゅんび くさと みず  
私は、牛の餌を準備したり、草取りや水くみなど、やることがたくさ  
よる まめあぶら ちい あ もと あさいと かわ あ がた  
んありました。夜は豆油の小さな明かりの下で、麻糸の皮むきを明け方  
までやりました。麻糸を売って現金収入を得るためでしたが、その作業  
あさいと う げんきんしゅうにゅう え さぎょう  
は1年のうち3か月以上も続きました。それでも生活が大変で、他の家  
ねん げついじょう つづ せいかつ たいへん ほか いえ  
の草取りも手伝ってお金をもらいました。大変でしたが農閑期には小学

こう べんきょう うれ がくひ はら  
校で勉強することができて嬉しかったです。でも、学費が払えなくなっ  
てしまい、卒業直前に退学しなければなりませんでした。すごく残念で  
したが仕方ありませんでした。

(間)

あに ちょうこう きかいのうじょう とらくたー おお のうきぐ つく て  
兄は、趙光機械農場というトラクターなどの大きな農機具を作り、テ  
す とこうさく のうじょう さいごろ いちねはん はたら のう  
スト耕作をする農場に 14歳頃から一年半ほど働いていました。この農  
じょう せんぜん にほんじん つく ご ちゅうごく かんけいせきにんしゃ  
場は戦前、日本人が作ったものでした。その後、中国の関係責任者が、  
けいえい ひ つ にほんじん ぎじゅつしゃ にんあま のこ はたら  
経営を引き継ぎました。日本人技術者30人余りも、残って働いていまし  
た。1953年に、そこで働いていた日本人が日本に引き揚げることになり  
ました。兄は帰国する準備のために、農場から遠く離れた家に帰って連  
らく ま わたし にほん かえ きかい ときはは さい  
絡を待っていました。私たちも日本に帰る機会でしたが、その時母は再  
こん ようふ こ わた かえ むずか  
婚していて養父が子どもを渡してくれなかったので帰るのは難しかった  
です。でも、兄は既に15歳で日本語も大丈夫だったので、母は、兄だけ  
にほん きこく おも あに ところ てがみ  
でも日本に帰国してほしいと思っていました。しかし、兄の所に手紙が  
とど ふね で あと  
届いたのは、船が出た後でした。

(間)

ねん はは だ てがみ はは じっか とど おやこ にん ぶじ  
1954年によく母の出した手紙が母の実家に届いて、親子4人の無事  
にほん とど ご ちち ねん しべりあ ちち じっか  
が日本に届きました。その後、父が1949年にシベリアから父の実家であ  
しもに た ふくいん さいこん  
る下仁田に復員し、再婚していたことがわかりました。

(間)

ねん わたし さい こうあんきよく ひと こくせきかくにん き  
1957年、私が16歳のとき、公安局の人が国籍確認をしに来ました。

わたし ははどうよう にほんこくせき えら がいこくじん たいざい きよ  
私は、母同様に日本国籍を選んで、外国人として滞在することにして、居  
りゅうしょう にほん ぼ す ぼ ー と  
留証をもらいました。これがあると、日本のパスポートをもらいやすい  
ということを母から聞いて知っていました。私は日本がどんな所か知り  
ませんでしたし、こんご にほん かえ まった  
今後、日本に帰れるかどうか、全くわかりませんでした  
が、じぶん にほんじん いしき  
自分が日本人だという意識はありました。

## (間)

さい だむ こうじ さぎょういん はたら だろ かつ じんりき  
17歳のとき、ダム工事の作業員として働きました。泥を担いで人力で  
とうほうこうすい こ ゆうめい だむ つく さい しょうがっこう きょういん  
東方紅水庫という有名なダムを造りました。18歳のとき、小学校の教員  
が足りないので、やってみないかと言われて、しけん う べんきょう  
試験を受けました。勉強  
はは おし はは わたし おぼ うれ  
は母が教えてくれました。母は、私がよく覚えるのが嬉しかったようで、  
たの おし しけん ごうかく しょうがっこう きょういん  
楽しそうに教えてくれました。そして試験に合格して、小学校の教員に  
なりました。

さい ちゅうがっこう きょういん おっと けっこん おっと わたし  
19歳のとき、中学校の教員をしていた夫と結婚しました。夫は私  
にほんじん し ご せいじうんどう お  
が日本人だということを知っていました。その後、政治運動が起こって、  
にほんこくせき わたし かいこ  
日本国籍の私は解雇されました。

わたし かいほくちん てんきょ おっと りょうしん どうきょ にん むすこ  
それから私たちは、海北鎮に転居して夫の両親と同居し、3人の息子  
そだ こ ちい ころ まちこうば はたら おお  
を育てました。子どもが小さい頃は、町工場で働き、大きくなってから  
でんきせつびがいしゃ せいしゃいん はたら あと かいほくこくえいやっきょくおろしせんたー  
は、電気設備会社で正社員として働いた後、海北国営薬局卸センターで  
えいじゅうきこく ねんかんはたら しゅるい かんぼうやくめい おぼ  
永住帰国するまでの4年間働きました。1500種類の漢方薬名を覚えなけ

ればならない責任ある仕事で、私にはやりがいのある仕事でした。

(間)

文化大革命の頃、日本人や日本人と結婚した人は、批判されたりしました。中国では国内の運動なので外国人を巻き込んではいけないというお触れが出ていましたが、私たちは、あまり表に出ないようにしたり、意見も言わないようにして、身をひそめるように生活していました。それで、危険なことはありませんでした。

(間)

1972年に日中の国交が正常化され、日本に帰国する道が見えてきました。母は1975年、弟を連れて3か月ほど国費で一時帰国しました。また、私は1976年に、当時4歳だった三男と二人で、実父のいる下仁田に5ヶ月間、一時帰国しました。父は、再婚した奥さんと娘さんを連れて、羽田空港に迎えに来てくれました。30年ぶりでしたが、写真で見ていたのですぐに分かりました。感激して涙があふれてきました。でも、私は日本語が全く話せず、父は中国語をほとんど忘れていて、いろいろな思いを伝えることはできませんでした。父の家で過ごした夜、何も話せませんでしたが、嬉しかったです。この里帰りの時、満州で隣の家に住んでいた人から、祖父母が終戦後の11月頃に、長春の収容所で病気になって亡くなったことを知りました。

あっという間に5ヶ月が経ち、私と息子は家族が待つ中国に戻りました



た。父に対する未練もありましたが、この時、日本のパスポートがもらえたので、またいつか会えると思いました。

## (間)

1977年、養父が62歳で亡くなりました。母はすぐにでも永住帰国したかったと思いますが、実家の反対を押し切って渡満したことや母の自分を曲げられない性格などで、実家の兄弟と喧嘩状態で、実家を頼りたくなかったようです。また、父は再婚していたので、母の帰る場所はどこにもありませんでした。それで、開拓団時代の知り合いに相談して、1979年、一時渡航書で前橋市に自費帰国しました。幸いにも保証人になってくれる人がいて、そのまま永住帰国することができました。その半年後には弟家族が永住帰国しました。私は日本での生活が想像できませんでしたので、母や弟たちの帰国後の様子を聞いたりして、家族で話し合いました。私も夫も中国で仕事がありましたが、日本で何でも頑張ればどうにかなると思いました。もし帰るなら、子どもたちが小さいときであれば、言葉を覚えるのも早いし、将来自立できるだろうと思い、1981年に永住帰国しました。そしてその2年後に兄家族が永住帰国し、戦後40年近く経ってようやく全員が日本に帰国しました。また、母と養父の間に来た弟家族も1981年に母が呼び寄せて日本に来ました。

## (間)

帰国した時、私たち家族は日本語が全く話せませんでした。私は40

さい おっと さい にほん ご べんきょう たいへん はや じりつ  
歳、夫は44歳で、日本語の勉強はとても大変でしたが、早く自立しよう  
どりょく わたし さいしょ でんし こうじょう ねんあま はたら ちゅうごく  
と努力しました。私は最初、電子工場で5年余り働いてから、中国で  
けいけん ほうせい かいしゃ ていねん はたら  
経験のあった縫製の会社で定年まで働きました。

しゅじん にほん き ねん にほん せいかつ な いま だいじょう  
主人は、日本に来て37年になるので、日本の生活にも慣れて今は大丈  
ぶ い にほん き い うれ  
夫だと言っています。日本に来てよかったと言ってくれて、嬉しいです。

こ にほん がっこう わたし こ  
子どもたちは、日本の学校でいろいろなことができました。私も子ど  
もたちも日本語がわかりませんし、学校の規則や習慣も全然違います  
から、同級生と喧嘩をしたり、先生に怒られたりしました。あの時は、  
むすこ いや おも くや おも  
息子たちも嫌な思いをして、悔しかったと思います。

## (間)

ねんちち さい ねんはは さい な きょねんわたし  
1985年父が70歳で、1992年母が76歳で亡くなりました。去年私は、  
はは な さい はは わたし せんごなが あいだちゅうごく  
母が亡くなった76歳になりました。母や私のように、戦後長い間中国  
のこ ひと こ ちが うんめい わたし  
に残された人たちは、それぞれ違う運命がありました。私  
はは こ まも くろう わたし はは いっしょ  
の母は子どもたちを守るためにすごく苦労しました。私は母と一緒にい  
たので、自分の名前や生年月日などがわかります。孤児になり中国人に  
もらわれた人の中には、自分の日本の身元がわからない人も大勢います。  
また、いい家にももらわれ学校にも入れてもらい大事にされた人もいれば、  
そうでない場合もありました。

わたし こ ころ はは にほん ご つか  
私は、子どもの頃、いじめられないように、母に日本語を使わないで  
い にほん ご はな わたし にほんじん  
と言って、日本語が話せないようになりましたが、やはり「私は日本人

です」。中国では、中国人に負けられないといつも思っていました。

しかし日本に帰ってきてからは、言葉がわからないし習慣も違って大変な日々でした。でも、年を取ってから子どもたちに迷惑をかけないようにしたかったので、日本語を勉強して一生懸命に働きました。本当にいろいろありましたが、今は日本に帰って来てよかったと思っています。

(間)

今日は、皆さん一人一人に、私たちの人生について知っていただき、残留邦人問題について考えていただきたいと思い、勇気を出してお話ししました。

最後まで、ご清聴、ありがとうございました。